天岩戸神話と日蝕

2024年11月18日　　23:54

【はじめに】

「卑弥呼の日蝕・再考」にて、西暦247年3月24日の皆既日蝕は日本列島では皆既日蝕の状態を実見することはできず、壮絶としか言いようがないような社会状態は発生しなかった可能性が高いとしました。この日の皆既日食がもしかしたら天岩戸神話につながるという「歴史の愉しみ」も消えたかと思われます。しかしながら、天岩戸神話の原点になるような皆既日蝕は他になかったのかを国立天文台の日月食等データベースというページを参照しつつ考えてみたいと思います。

【天岩戸神話のあらまし】

『日本書紀』の神代紀本文から要約します。
素戔嗚尊（スサノオノミコト）は根の国に行く前に高天原に行き、姉の天照大神（アマテラスオオミカミ）に別れの挨拶に行くが、天照大神は素戔嗚尊の心を疑い、角髪（みずら）を結い弓弭（ふはず）を振り立て剣の柄を握り勇猛な姿で素戔嗚尊を詰問した。素戔嗚尊は赤心を証明するため誓約を行う。天照大神は素戔嗚尊の十握剣を借りて天真名井で振り濯ぎ、三柱の女神が生まれた。次に素戔嗚尊は天照大神の八坂瓊五百箇御統（やさかにのいおつのみすまる）を天真名井で振り濯ぎ、五柱の男神が生まれた。その一柱目が正哉吾勝勝速日天忍穂耳尊（マサカアカツカチハヤヒアマノオシホミミノミコト）であり、その子孫が神武天皇となる。天照大神はこの時、八坂瓊五百箇御統は自分のものであるから五柱の男神はことごとく自分の子であると言った。
上の神話から、天忍穂耳尊は素戔嗚尊から生まれましたが、天照大神の子となったことで、天照大神は皇祖神とされます。天忍穂耳尊の生みの親は素戔嗚尊なので男系です。天真名井の誓約神話です。

しかしその後の素戔嗚尊の行いは無状であり、天照大神の田に春には種子を重ね播きするは、田の畔は壊すは、秋には天斑駒を田に放つ。天照大神が新嘗祭を行う時には新宮にこっそり大便する。また天照大神が神衣を織る齋服殿に天斑駒の皮を剥いで投げ入れた。天照大神は驚いて梭で体が傷つけられた。そこで天照大神は怒って天石窟に入って磐戸を閉じてしまった。それで国中は常闇となり昼夜の別も分からなくなった。
そこで八十万の神は天安河の川辺に集い相談した。思兼神（オモイカネノカミ）が深慮遠謀で常世長鳴鳥を互いに長鳴きさせた。手力雄神（タヂカラオノカミ）を岩戸の側に立たせ、中臣連の遠祖天児屋命（アマノコヤネノミコト）と忌部の遠祖太玉命（フトタマノミコト）は天香山の五百箇眞坂樹（沢山の榊）を掘り、上の枝には八坂瓊五百箇御統、中の枝には八咫鏡、下の枝には青や白の幣を懸けて祈祷をした。猿女君の遠祖天鈿女命（アメノウズメノミコト）は手に茅纏の矛を持って天岩戸の前で巧みに踊った。香具山の榊を髪飾りにひかげの葛を襷にし、篝火を焚き桶を伏せ置き神憑りのように踊った。
この時天照大神は自分が窟屋に閉じこもって豊葦原中国は長い夜のはずなのに、なぜ天鈿女は楽しく声を上げているのかと、手で岩戸を少し開けて覗いた。すると手力雄が天照大神の手を取り引き出した。そこで中臣神や忌部神が注連縄を張り戻らないように請うた。
このようにして明るさは戻り、神々は素戔嗚尊を罰して高天原から追放します。以上が天岩戸神話のあらましです。『日本書紀』に引用されている別の書や『古事記』では登場する神が違ったり、エピソードに異同があったりしますが、基本的な構造はほぼ同じです。
ここで押さえておきたいのは、日の神である天照大神が天石窟に入って磐戸を閉じてしまったら、国中は常闇となり昼夜の別も分からなくなった点であり、そして磐戸を少し開けて引き出された点です。

【天岩戸神話と皆既日蝕】

太陽と月にまつわる神話は世界各地にあります。太陽が東の空に昇ることによってその日が始まり、西に沈むことで夜が到来します。そのこと自体が古代の人々にとっては当然のことでもあり、また季節により日の出日の入りの位置が変わっていく、太陽の光の強さが変わっていくことも、当然のことでもあり不思議なことでもあったでしょう。特に農耕民族にとっては、太陽によって周期的な生活がなされていることが当然であり、またなぜそうなるのかを探求する好奇心を持つ人も多くいたことでしょう。太陽の力が一番弱くなる時期があり、そしてまた光が強くなっていく。そして農作物の種まきを行い、成長し、収穫する。その頃にはまた太陽の力が弱まっていく。この周期を1年という単位にしたことでしょう。そして太陽が一番弱まっている時から復活していく時期を1年の始まりとしたのでしょう。その時は太陽の復活を喜び、また1年の始まりを祝う祭が行われるようになったのでしょう。そしてそれらのことを理由付けする様々な話が世界各地で語られるようになり、それが神話として残ったのでしょう。このような文脈では、日本神話の天岩戸神話も、太陽の衰弱と復活を表した神話として位置づけられる考えもあります。
しかしながら、天岩戸神話での、日の神である天照大神が天石窟に入って磐戸を閉じてしまったら、国中は常闇となり昼夜の別も分からなくなった物語は、皆既日蝕を想起させます。今は様々な観測方法により、あらかじめ皆既日蝕が予測され、徐々に太陽が欠けていく姿を見ることができます。しかし古代の人々は太陽が徐々に欠けていく姿を、かなり日蝕が進むまで観察することができません。気付くと太陽が三日月のような姿になっていて、次第にそれが細くなり、ついには夜のようになってしまった。それを体験した人々は、おそらく人生初めての出来事に何を思ったのでしょうか。今のように日蝕の仕組みも分からなければその後どうなるのかもわかりません。そしてしばらくすると、太陽の片隅が姿を現し光り輝きます。そして次第に元通りに明るくなっていきます。それは天照大神が磐戸を少し開けて引き出されたような物語につながったのかもしれません。
古代日本で皆既日蝕を体験した人は、その稀有な出来事を語り継ぐ中で、なぜそのようなことが起きたのか、そしてどうして元に戻ったのかを理由付けしていったのでしょう。『日本書紀』や『古事記』に記された日本神話には、いくつもの由来譚があります。日本の古代のいつかどこかで、皆既日蝕を体験した人々がいて、語り継がれる中で天岩戸神話が形成されていったのかもしれません。

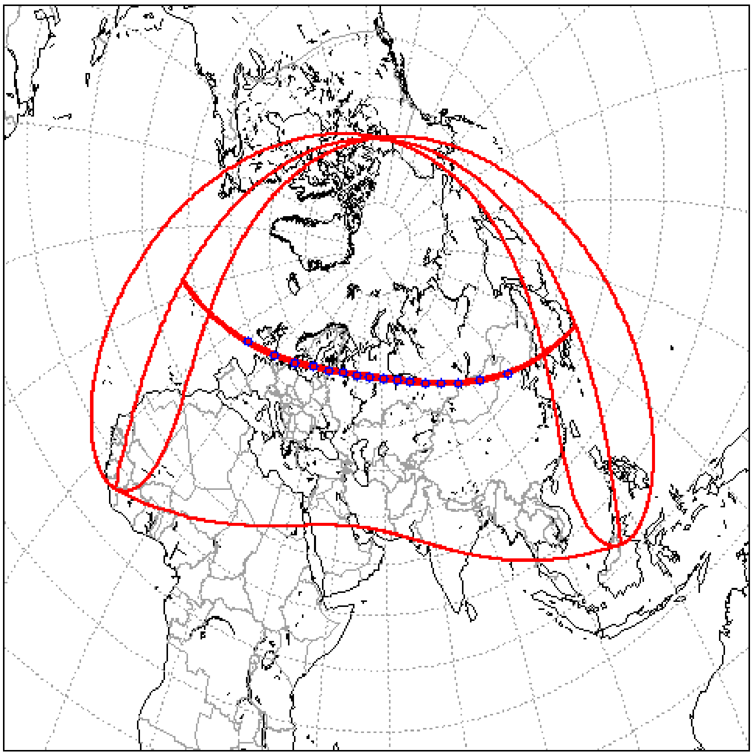
【日本古代の皆既日蝕】

日本での日蝕の最古の記録は『日本書紀』に以下のように記載されています。

推古紀卅六年三月丁未朔戊申条：日有蝕盡之。（628年）
推古天皇の時代には既に日蝕に関する知識はあったと思われますので、記述はこれだけです。
国立天文台の日月食等データベースから弥生後期以降の日本列島中心部近辺で観測可能な皆既日蝕と金環皆既日蝕を抜き出してみました。6世紀には暦や天文の知識もあると思われるので、下限は5世紀までとします。

項番	西暦	日蝕の種類	日本列島で中心食のおおよその範囲
1	53/3/9	金環皆既日蝕	九州～四国～本州の太平洋沿岸
2	154/09/25	皆既日蝕	新潟～関東
3	158/07/13	皆既日蝕	近畿
4	248/09/05	皆既日蝕	山陰地方の日本海上～北関東
5	273/05/04	皆既日蝕	関東
6	454/08/10	皆既日蝕	九州中央部～四国の太平洋上

項番1の西暦53年の金環皆既日蝕は九州から四国にかけては太平洋上で皆既状態が確認でき、本州では紀伊半島の最南端で確認できます。おそらく陸上で皆既日蝕を確認した人物はほとんどいなかったものと想定されます。項番2の皆既日蝕は今の新潟県の辺りから関東地方にかけて皆既状態が確認できたと思われますが、地理的な関係からおそらく日本神話に繋がる線ないと思われます。項番3の皆既日食は近畿地方で皆既状態が確認できました。（図1参照。なお「247/03/24 (成務天皇28年05月30日) 皆既日食」と成務天皇28年とあるのは日月食等データベースが『日本書紀』の紀年をそのまま和暦表示に使用しているため。以下同）。大和での太陽の見え方を確認しましょう。
大和では夕方日没前に日蝕が始まりました。ある程度太陽が欠け始めると、西の山に向かって沈んでいく夕日が欠けていく姿が確認でき、そして太陽が全て月によって隠されます。しばらくして太陽からの光がまた差し出し、そしてそのまま沈んでいきます。もしかしたら大和の西側の山の高さにより、日没のタイミングは変わります。欠け行く太陽がそのまま西の山に姿を消し、暗闇となったかもしれません（表1-1及び図1-1参照）。
では西側に山のない今の大阪からの見え方はどうでしょう。中心食の終わりから日の入りまで20分ほどありますが、上町台地から眺めると西側に山がないので中心食の終わり（太陽の片隅から光り輝き出す）を確認できたのではないでしょうか（表1-2及び図1-2参照）。
項番4の皆既日蝕では山陰地方の日本海上から現在の石川・富山から北関東にかけて、早朝に皆既状態が確認できたようです。項番5の皆既日蝕では信越地方から南部を除く関東地方にかけて、日中に皆既状態が確認できたようです。これらについてもおそらく日本神話に繋がる線ないと思われます。
項番6の皆既日蝕では九州の佐賀県から大分県にかけて皆既日蝕が確認されました（図2参照）。宇佐八幡宮のある大分の状況を見てみましょう。10時過ぎに中心食が始まります。天候が良ければはっきりと皆既日蝕が確認できたでしょう（表2及び図2-1参照）。とはいえ5世紀の日蝕から神話が生まれて、それが記紀神話に取り込まれていくというには時間的に無理があるようにも思えます。

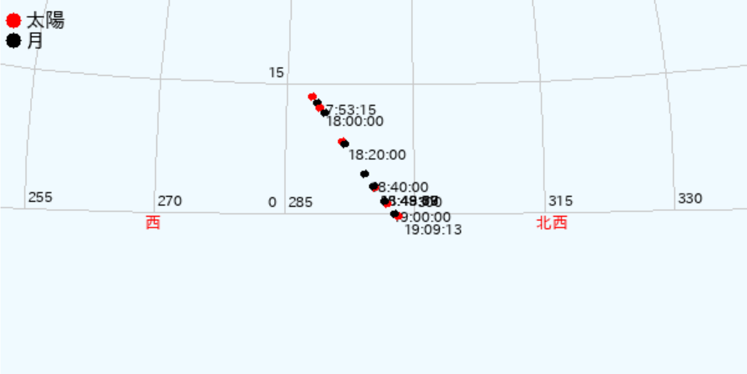


《図1：158/07/13 (成務天皇28年05月30日) 皆既日食》

奈良(奈良県): Nara
緯度:34.6833° 経度:135.8333° 標高: 0.0 m 標準時:UT+9h ΔT＝8831.2s (S2020)

日時		方向角[°]			太陽[°]		視半径["]			かける割合		その他
年月日	時刻	北極	極頂	天頂	高度	方位	太陽	月	角距離	食分	面積比	備考
158/07/13	17:53:15	280	58	223	13.6	288.0	947	958	1904	0.000	0.000	食の始め
158/07/13	18:00:00	280	57	223	12.3	288.9	947	957	1682	0.117	0.047	
158/07/13	18:20:00	280	56	224	8.4	291.5	947	956	1012	0.471	0.360	
158/07/13	18:40:00	281	54	226	4.7	294.1	947	955	321	0.835	0.793	
158/07/13	18:48:56	310	53	256	3.1	295.4	947	954	8	1.000	1.000	中心食の始め
158/07/13	18:49:07	10	53	316	3.1	295.4	947	954	4	1.002	1.000	食の最大
158/07/13	18:49:19	70	53	16	3.0	295.4	947	954	8	1.000	1.000	中心食の終り
158/07/13	19:00:00	99	52	47	1.2	296.9	947	954	388	0.799	0.747	
158/07/13	19:09:13	99	52	48	-0.2	298.2	947	953	721	0.623	0.532	日の入り

《表1-1：158/07/13 (成務天皇28年05月30日) 皆既日食》



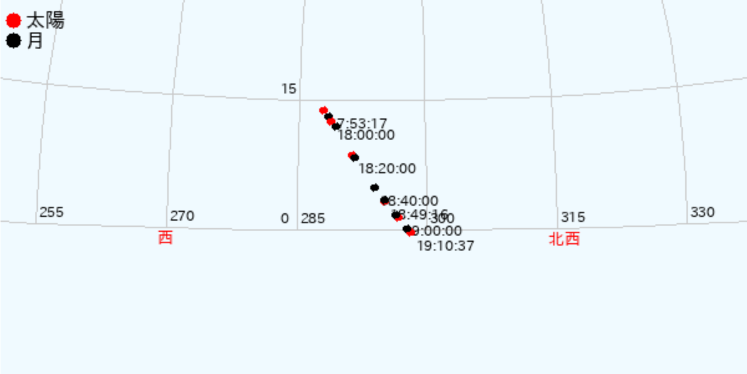
《図1-1：158/07/13 (成務天皇28年05月30日) 皆既日食》

大阪(大阪府): Osaka

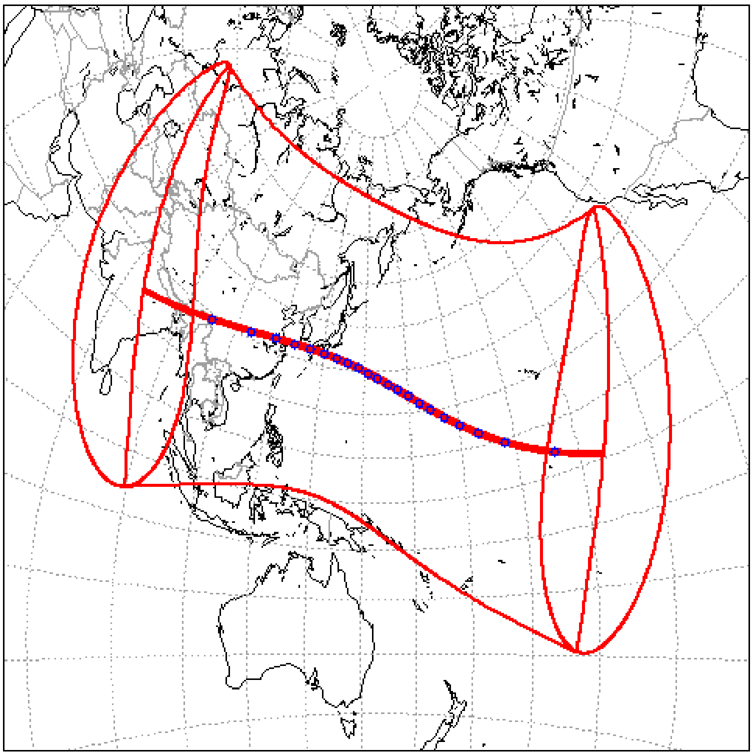
緯度:34.6833° 経度:135.4833° 標高: 0.0 m 標準時:UT+9^h ΔT＝8831.2^s (S2020)

日時		方向角[°]			太陽[°]		視半径["]			かける割合		その他
年月日	時刻	北極	極頂	天頂	高度	方位	太陽	月	角距離	食分	面積比	備考
158/07/13	17:53:17	281	58	223	13.8	287.9	947	958	1904	0.000	0.000	食の始め
158/07/13	18:00:00	281	57	223	12.5	288.7	947	957	1684	0.116	0.047	
158/07/13	18:20:00	281	56	225	8.7	291.3	947	956	1015	0.469	0.358	
158/07/13	18:40:00	282	54	227	5.0	294.0	947	955	326	0.832	0.790	
158/07/13	18:49:16	10	54	316	3.3	295.2	947	954	10	0.999	1.000	食の最大
158/07/13	19:00:00	98	53	46	1.4	296.7	947	954	383	0.802	0.751	
158/07/13	19:10:37	99	52	47	-0.2	298.2	947	953	766	0.599	0.504	日の入り

《表1-2：158/07/13 (成務天皇28年05月30日) 皆既日食》



《図1-2：158/07/13 (成務天皇28年05月30日) 皆既日食》



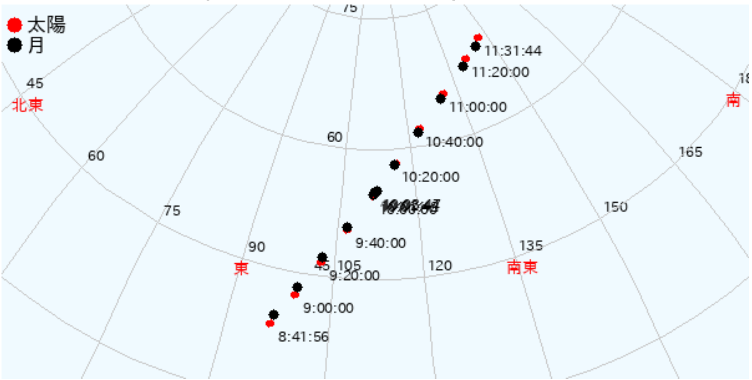
《図2：454/08/10 (安康天皇元年07月01日) 皆既日食》

大分(大分県): Oita

緯度:33.2333° 経度:131.6167° 標高: 0.0 m 標準時:UT+9^h ΔT＝6023.1^s (S2020)

日時		方向角[°]			太陽[°]		視半径["]			かける割合		その他
年月日	時刻	北極	極頂	天頂	高度	方位	太陽	月	角距離	食分	面積比	備考
454/08/10	8:41:56	281	-60	340	38.7	96.3	952	980	1932	0.000	0.000	食の始め
454/08/10	9:00:00	281	-59	340	42.4	99.3	952	981	1480	0.238	0.135	
454/08/10	9:20:00	281	-58	339	46.5	102.8	952	982	994	0.493	0.387	
454/08/10	9:40:00	280	-56	337	50.6	106.7	952	983	522	0.742	0.681	
454/08/10	10:00:00	264	-54	318	54.5	111.3	952	983	66	0.982	0.984	
454/08/10	10:01:42	241	-54	295	54.9	111.7	952	983	32	1.000	1.000	中心食の始め
454/08/10	10:02:44	193	-54	247	55.1	112.0	952	984	21	1.005	1.000	食の最大
454/08/10	10:03:47	145	-54	199	55.3	112.2	952	984	32	1.000	1.000	中心食の終り
454/08/10	10:20:00	107	-51	158	58.4	116.6	952	984	388	0.813	0.772	
454/08/10	10:40:00	106	-47	153	62.0	123.0	952	985	828	0.583	0.489	
454/08/10	11:00:00	106	-41	147	65.3	130.8	952	985	1261	0.355	0.243	
454/08/10	11:20:00	106	-34	140	68.3	140.5	952	986	1689	0.131	0.056	
454/08/10	11:31:44	106	-28	134	69.7	147.3	952	986	1938	0.000	0.000	食の終り

《表2：454/08/10 (安康天皇元年07月01日) 皆既日食》



《図2-1：454/08/10 (安康天皇元年07月01日) 皆既日食》

【おわりに】

「お日さんが月みたいに細くなって、そのうち夜みたいに真っ暗になって、そしてまたお日さんが元に戻って行ったってことがあったんや」
「なんでそんなことがあったんやろ」
「誰か悪いことして、お日さんが気分悪くして隠らはったんちゃうか」
「それでみんなで出てきてくれって祈ったら、また顔出さはったんか」
そんな、人生の中でも稀有な体験を話していくうちに、神話になっていったのかもしれません。こんなことがあった。それはなぜ起きたのか。それをプレアニミズムとも言われる日本古代の精神世界では、太陽神を巡る物語として語っていったのかもしれません。
この物語の元となったのは、もしかしたら2世紀半ばに今の近畿地方で観られた皆既日蝕によるものかもしれませんが、当時の遺跡の中からその痕跡を見つけ出すことは至難の業かと思います。もしかしたら、もっと違う時間の、あるいはもっと違う場所で観られた皆既日蝕が元になっているのかもしれません。しかしながら、日本の周辺に同じモチーフの神話も残っていないので、それを探るのは不可能と言えましょう。